説教20211219午後　サムエル上2-1ルカ1-39「平和の挨拶」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

私たちは挨拶によってお互いの関係を開始します。初めてお会いする時も、朝に再び顔を合わせる時も、私たちは、さまざまな挨拶語を用いてお互いを確かめ合います。礼拝の中でも、平和の挨拶と言って、お互いに主の平和を確かめ合うひと時が持たれます。

挨拶語にはさまざまな言葉が用いられます。おはようございます。こんにちは、ご機嫌いかがですか、ようこそ、おめでとう。

これらの言葉の中には、現実的な意味を持たないで、単に、励ますことや、景気づけ等のために用いられるものも多いことでしょう。例えば、おはようございます、という言葉の厳密な意味を考えてもあまり埒が明かないということです。

ところが、この挨拶語が具体的な意味を失って、慣用的に発せられる言葉になっている、というところにこそ、挨拶語の効果が見出されるのではないでしょうか。例えば、落ち込んでいる人が、昼頃暗い気分で目を覚ました時に、隣人から「おはようございます」と挨拶されたら、なんとなく朝の光の中で溌溂とするような気分にさせられるかも知れません。

さて、私たちが外に出て、マスクをつけるようになってから２年近くが経ちます。このマスクという物は、実に挨拶することの妨げになるのではないかと私は思います。第一、顔がマスクで隠されているため、誰が誰かを認識することが素顔の様にはすんなりとはいかないのです。第二に、たとえ声を発して挨拶したとしても、口が覆われているので、挨拶語がストレートに相手の耳に飛び込んだ気がしないのです。ここのところが肝要で、挨拶語というのは確たる意味を持たず、ただ、相手を励ましたり慰めたりするような言葉ですから、何と言ってもその音声が相手に直接、なまで届けられることが肝要だと思うのです。願わくは、早く私たちがマスクを外すことが出来ますように。

さて、今日のルカ福音書の聖書箇所に、（マリアは、）ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。

この挨拶、という言葉は聖書の中で平凡な語句ですので、或いは読み飛ばしてしまうかもしてませんが、実はこの挨拶という言葉には、重要な事柄が秘められています。ここで聖書は、挨拶というのが、どういう働きをするのか、、励ますことなのか、或いは喜ばすことなのか、或いは悪い意味で、呪いの言葉になってしまうのかを、定義づけしているのです。今日の聖書箇所の少し前、28節からに、「『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。」と記されています。この時、挨拶は、実に喜ばしい定義づけを与えられました。つまり、「おめでとう」、ギリシャ語では「カイレー（喜んでください）」という意味ですが、この言葉こそが挨拶語になったのです。このことがどれくらい喜ばしいことかと言いますと、例えば、今の日本では隣人に挨拶する時に、「おめでとう」というのは、相手の誕生日か、クリスマスの日か、正月３が日か、など、或る特別の日に限られていますね。だから、何の祝い事もない平日に、隣人に「おめでとう」などと挨拶したら、「？、一体どんないいことあったの」と問い返されるのが落ちでしょう。ところが、この「カイレー（喜んでください）」「おめでとう」という挨拶語は１年３６５日四六時中、用いることが出来る挨拶語なのです。こんな喜ばしいことはないでしょう。今の日本にも、人を四六時中励ますことが出来る、こんな挨拶語があれば、この世の中どんなに明るくなるか知れませんね。

さて、この「カイレー（喜んでください）」「おめでとう」という挨拶語は、神様が私たちに与えて下さった言葉です。だから、マリアが、エリザベトに「カイレー（喜んでください）」と挨拶をしたときに、それをマリアの胎内にいる神の子イエス様も、ばっちりと耳にして、そうしてその体を躍らせることによって応答されたのでした。そうしてこの万能の挨拶語は次々によい連鎖反応を起こして伝わっていきます。イエス様が喜び躍ったのを聖霊によって感じたエリザベトは、「あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう」とマリアに言いました。

私たちはこの成り行きから、言葉の誕生の神秘に思いをいたすことが出来るでしょう。つまり、私たちは、言葉の意味を人間なりによく考えて、それを正確に定義したと思ってその言葉を用いてみても、あんまりうまく意味が通じないということが起こります。それに対して、この「カイレー（喜んでください）」「おめでとう」という言葉は、まるで、創世記の初めに神が「光あれ」と言われて光があったように、私たちを、悲しみの極みから救い出し、喜び躍る者へと変えられる働きをしています。

そして、このクリスマスに、私たち全ての人間に与えられたイエス様も、神の言葉そのものであります。マリアは、神の子イエス様を胎内に宿して、この上なく幸せであり、「今から後、いつの世の人も　わたしを幸いな者と言うでしょう」と、主なる神を誉め歌いました。神の子を宿した幸せというのは、少なくとも男には分からない幸せでありましょう。

　しかし、イエス様は、私たち全ての人間に言葉を与えて下さっています。その御言葉はルカ福音書１１章27節～に記されています。お読みします。「イエスがこれらのことを話しておられると、ある女が群衆の中から声高らかに言った。「なんと幸いなことでしょう、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房は。」しかし、イエスは言われた。「むしろ、幸いなのは神の言葉を聞き、それを守る人である。」」

これはイエス様がよくされる比較表現が用いられていまして、日本語では、むしろ、という接続詞が使われています。。このイエス様の御言葉は、あなたを宿した胎、あなたが吸った乳房であるマリアは幸いでなかったという意味ではありません。そうではなくて、神の子を宿したマリアは誰よりも幸せであったが、彼女よりも神の言葉を聞き、それを守る人の方が幸せ、という、論理的には矛盾ではないかと思われるような言葉を用いて、イエス様は、私たち全ての人間が、この上なく幸いであることを言われているのです。

私たちは誰しも、イエス様の言葉を信じて、神の言葉を聞き、それを守る人とされることが出来ます。

このクリスマスの時にその全てに勝る喜びと救いを共に味わっていきたいと願います。

祈り

天の父なる神

私たちは、闇に支配されているこの地にあって、今、悲しみと苦しみに覆われています。そしてクリスマスのこの時に、まことの光であり、私たちの唯一の救い主である御子キリストを待ち望んでいます。どうか、私たちを御子を信じるものとし、最後の時に、喜び躍る天の国に入れるようにしてください。あなたは、悔い改める者の、全ての罪を赦し、この母なる教会にあって、私たちを守り祝福し、最後まで導いて下さることを信じます。

今日は、鈴木喜美子牧師の口を通して、「神はあなたを忘れない」というテーマが語られました。

今も生きて私たちを支配される御子キリストは、私たちが闇の中に死ぬのではなく、光のうちに、この世を去った後も永遠に生き続けることを望んでおられます。どうか私たちが主の十字架に向き直り、この世の偽りから解放されて、御子が与えられる永遠の命の道を歩んでいくことが出来るようにしてください。

私たちは、この世に生まれた御子キリストにすがり、彼と共に暮らしていく生活を送り、この世にはびこる孤独から解放されたいと願っています。主イエス・キリストは誠の神の子、神の愛の人であります。どうか、私たちが各々の心の中に、彼をお迎えして愛情豊かに日々の生活を送っていくことが出来ますように。

父と聖霊とともに